D 40　藍づくりと国頭地方の山林開墾との関係

具志川市役所市史編さん室（嘱託）　嘉陽妙子

目的　明治12年の廃藩置県前後に職を失った士族が田舎下りして国頭地方の未開の地に食を求めて入植した。彼らは屋取（ヤードゥイ）と言われていた。本研究では、国頭村に現在残っている藍壺の所在地、規模等を調べどのような場所で藍づくりが行なわれていたか、それらはどこに出荷されていたかを知り、開墾との関係を考察することを目的としている。

方法　1987年6月～1988年12月の間に、本部町伊豆味で藍づくりの工程を見学した。今帰仁村では古老の経験者から昔の藍壺と藍づくりの事を聞いた。国頭村では各字を回って昔の藍づくりについて知っている古老を探し、聞き取りを行い、藍壺の残っている所は現地調査を行った。また文献資料も調べた。

結果　聞き取りにより、国頭村の場合、間切時代ほとんどの村に藍壺のあったことが分った。そして、その藍壺はムラウチでは無く山奥の開墾地にあったことも分った。確認できた藍壺は川のそばにあり、赤土と石灰を混ぜ合わせたもので作られており、3m前後の丸いのと2m前後の長方形が対になっていたが、中には丸いのが2つに長方形がひとつというのもあった。それは栽培面積の広さに関係するのではないかと考えられる。製造された泥藍は山原船で那覇、与那原、与論島、沖永良部島に運ばれていた。開墾地での生活はすぐ換金できる材木、マキ取り、炭づくりが主だった。その傍ら藍づくりを行うというのがほとんどだった。しかし藍づくりをしに入植した人もいた。これらのことから、国頭地方の藍づくりは屋取の開墾地への入植によって盛んになったと考えられる。